高祖敏明神父様講話

カトリック学生の会創立 65 周年を祝して

カトリック麹町 聖イグナチオ教会

主任司祭 高祖 敏明（上智大学名誉教授）

カトリック学生の会創立 65 周年、おめでとうございます。

ただいまご紹介に与りました高祖敏明と申します。イエズス会司祭で、1977 年 3 月に司祭叙階の恵みを受けました。現在は、上智大学のお隣のカトリック麹町 聖イグナチオ教会の主任司祭をつとめております。

皆様もご存知かと思いますが、イエズス会という修道会は結構人づかいのあらい面がありまして、上智大学での奉仕の務めが終わって 71 歳で退職したところ、聖心女子大学に派遣され、そこでの学長の務めが 4 年の任期満了で終了して、少しゆっくりできるかと期待していたら、今度は聖イグナチオ教会で働きなさいとのことでした。しかも、助任司祭も経験しないで、いきなり主任司祭になるということで、東京教区の小教区の主任司祭の方々も、「助任も経験せずに主任なの!？」と、皆驚いていました。ただ聖イグナチオ教会には優秀な助任司祭が 4 人もおられますし、協力司祭も数人おります。その方々の働きに助けられて何とかつとめております。今日のこの集いの中にも、教会の各種聖歌隊の一員とか、聖イグナチオ教会でさまざまな奉仕をしてくださっている方がおられると思います。この場を借りて御礼申し上げます。いつもお世話になり、ありがとうございます。

さてカト学が 65 周年を迎えたということは、1959 年に誕生したということです。私が上智大学に入学したのが 1965 年 4 月。その当時は、6 学部（神学部、文学部、法学部、経済学部、外国語学部、理工学部）制で、全学生数は 5800 余人。そのうちカトリック信徒は 500 人を超えていました。全学生の約 1 割がカトリック信徒という割合です。1 年次の必修科目に宗教学と哲学とがあり、宗教学はカトリック学生が全員、学部学科の枠を超えて同じ一つの教室に集められ、指導司祭的な立場と役割を持つ神父様の授業を受ける決まりがありました。私が 1 年次のときの担当者はエヴァレット（小山信夫）神父様でした。私は外国語学部ドイツ語学科にいたのですが、宗教学の時間には、カトリック学生はみんな指定されたエヴァレット神父様の授業に出席しているので、自分のクラスにはいない。同じクラスに、ミタさんという東京出身のカトリック信徒がいました。ドイツ語学科で宗教学を教えていた先生はエーデルマン神父様だったのですが、毎回出欠をとられる。ところが、高祖もいないし、ミタもいない。ですから、ミタさんの名を何度呼んでも返事はありません。そこで、「ミタ？見たことがない」と冗談を言ったとか。こうした話が伝えられています。

私が入学した時点のカト学の会長は、たしか加藤容正さんで、数年後に創刊された「上智新聞」の初代編集長を務められた方です。その年の冬に会則に基づいて会長選挙が実施され、

新会長に選ばれたのは広島出身の岸本勝義さんでしたか、少々うろ覚えです。私は 2 年次からカト学に顔を出すようになったのですが、岸本会長の跡を継いだのは栄光学園卒の濱口篤志（1967 年会長）さんで、私は副会長に任命されました。しかし私は、2 年次が終了した 1967 年 3 月に大学を休学し、広島市の郊外、長東にあったイエズス会修練院に入りました。

2 年間の修練を終えて大学に復学したのが 1969 年 4 月。以来、カト学と本格的に関わるようになりました。私が大学を離れていた 2 年のあいだに学生運動が盛んとなり、上智大学でも激しい学園紛争が起きました。そうした時代に、石塚喜重さん（1968、69 年会長）、木島祐一さん、今成勝彦さん、高橋陽太郎さん、関口知子さん、佐藤邦夫さん（1970 年会長）、山邊雅晴さんと滋さんの兄弟、さらに安芸璋一さん（1971 年会長）、戸川清さん、大宅一裕さん、佐々木清美さん、秋山かほりさん、辰巳禎一さん（1972 年会長）、堀川るみ子さん、岡本正和さん（1973 年会長）らが会長やリーダー、サブ・リーダーを務めていたことを思い出します。これらの人々と知恵を出し合いながら、紛争の余燼が残る中、立て直して実行した春の新生歓迎キャンプ、夏休み中の夏季合宿なども良い思い出です。そして、その時代の指導司祭が、先年（2016 年 10 月 29 日）帰天された尾原悟神父様でした。

尾原神父様は、イエズス会司祭となり、神学課程を終えて上智大学文学部史学科に赴任され、同時にカトリック学生の会の指導司祭とされました。私たちカトリック学生へのメッセージを短い言葉でまとめられたのですが、それは、「一致と派遣」という言葉でした。上智大学にあってカトリック学生は同じ信仰を持つ仲間として、一致へと努める。しかし、それは内向きではなく、カト学から、それぞれの所属学科、所属するクラブやサークル、また所属する小教区教会に派遣され、そこで活動する。カト学は一致を深める場ではあるが、同時にそれぞれが活動する場、とりわけ各小教区教会に向けて派遣する場でもある。ですから、クリスマスなどいろいろな大事な典礼行事のときなど、自らの所属教会に帰ってそこで活躍しなさい、というのが、尾原神父様のメッセージでした。上智は上智で、カトリック大学として教職員や学生、その保護者や卒業生を対象にクリスマスミサやご復活のミサなどを開催するのですが、基本的には、首都圏に実家のあるカトリック学生は自分の所属教会に帰って、その教会を支え、発展させていく使命がある、ということでしょう。現在でも大切なメッセージだと思います。

先ほども言いましたように、私が大学に復学したのが 1969 年 4 月で、ちょうどカト学 10 周年の年でした。皆さまも 10 周年記念誌についてはご記憶があるかと思います。当時、10 周年を記念して何か冊子を作ろうということになり、どういう内容にするか、カト学内でずいぶん議論をし、時間も頭も使いました。紛争直後でもあり、卒業した先輩方の原稿を集めるのは難しいという状況で、いろいろ議論を重ねた結果、歴代会長が就任挨拶として書き残している文章を並べて、この 10 年の歩みを、それによって語らせることを思いつきました。

これらの文章では、歴代の会長が就任にあたって、それぞれ抱負や取り組みたい課題などを語っている。そこで、それらを年代順に並べればカト学の創立時からの歩みが浮き彫りになり、会の歴史を明らかにできるだろうと考えたのです。今回は 65 周年ということで、また何か冊子をまとめて刊行すると思いますが、是非、いい形で会の歩みを記述して後代に伝え、10 年後の 75 周年、さらに 2059 年に迎える 100 周年をも視野に入れた記念誌を作り上げて、カト学の持続的発展に道筋を示して行って頂きたいと願っております。

話は変わりますが、周年行事ということでいえば、今年、聖イグナチオ教会は現聖堂の献堂 25 周年を迎えています（1999 年 6 月 6 日に献堂）。古い聖堂の献堂（1949 年 4 月 17 日）から数えると 75 周年。さらに、聖イグナチオ教会は麴町教会であって、麴町教会としては 88 年、米寿を迎えています。といたしますのは、JR 四谷駅の麴町出口から番町小学校の方に向かう道筋の千代田区六番町に、以前カトリック中央協議会が置かれていたのですが、戦前、その場所には女子カルメル会修道院がありました。その修道院が練馬区上石神井の、現在のイエズス会修道院の奥まったところに移転したときに空き家となり、それを東京教区が引き取って麴町教会（幼きイエズスの聖テレジア教会）を開設したのです（献堂式は 1936 年 3 月 22 日）。その時点から数えると 88 周年というわけです。

ところがその教会は、1945 年 5 月の大空襲で焼け落ちてしまいました。しかも教会が全焼しただけでなく、私たちが今いるこの場所、上智のメンストの正門から東門に通る道筋の四谷駅に近い一帯、おおよそ三角形の形状を呈している、この地帯も皆焼けてしまったのです。聖テレジア教会が焼けてしまったあと、ミサをどこで捧げるかというときに、上智大学がクルトゥルハイム聖堂を提供し、そこで日曜日のミサを祝うことになりました。

戦争が終わってから、上智大学は、空襲で焼けた四谷駅に近い一帯、この三角地帯を購入取得しました。大学の史料を見ると、大学には規定によりグラウンドが必要ですから、今後の発展を見据えて、この場所を大学のグラウンドにする予定でした。真田濠は、その当時はまだ埋め立てられてはおらず、将来ここを上智大学のグラウンドとして使うなどの考えは、思いもよらぬことでした。一方、上智大学の復興に伴い、当時の 1 号館講堂（現上智小劇場）を聖堂代わりに使ってミサを行うようになり、麴町教会の司牧はイエズス会に委託されました。

この委託には、次のような事情と背景がありました。ちょうどその頃、戦災で多くの小教区教会を失った東京教区にバチカンの教皇庁から復興資金が届きましたが、当時の駐日バチカン使節パウロ・マレラ大司教は、「この資金は教区の諸教会再建に使い、麴町教会の再建はイエズス会に委ねたら」と土井辰雄東京大司教に進言しました。土井大司教はこの進言に首肯し、「麴町聖堂再建と所属信徒(約 1200 人)をイエズス会に委ねたい」との意向を示しました。イエズス会のブルーノ・ビッテル神父（カトリック復興委員会委員長）は 47 年 8 月 26 日にこの提案を受け入れて、新時代にふさわしい教会の再建を確約しました。

この日、上智大学のグラウンド案は完全に消滅し、この地を新しい教会用地に定めて麴町

教会を建設することになりました。しかし、その意味は、新しい教会建設にはバチカンからの復興資金を充当せず、教会建設と開設資金はすべてイエズス会が工面し、調達する責任を負うということです。そしてこの日、土井大司教はヘルマン・ホイヴェルス神父を麴町教会主任司祭に任命しました。

その当時、上智の講堂を使つての日曜日のミサには連合軍の外国人カトリック信徒も参加するようになり、1日に7回もミサを行つて対応しなければならないという状況でした。そういう事情から、同年9月1日、連合軍最高司令官派遣外交使節団を構成する各国のカトリック信徒代表が連名で、「新しい教会を都心の然るべき場所にはやく再建して欲しい」という要望書をビッテル神父に提出しました。これも追い風になって、建築計画が進められ、新しい麴町教会はイエズス会の創立者、ロヨラの聖イグナチオに捧げられることも決められました。こうした動向はバチカンにも伝えられており、教皇庁は48年5月12日付で、麴町教会を無期限でイエズス会に委託された小教区教会とする特典を付与しました。

戦後間もないという状況下、建築の資金集めも資材調達も大変な苦労があったようですが、世界の心あるカトリック信徒や教区、また要望書を提出した国々からの援助や贈り物に助けられました。同じ信仰をもつ人々が、戦後復興に立ち上がろうとする日本の、それも都心の教会再建に心を向け、志を言わば「派遣」してくれたのです。日本と同じ敗戦国のドイツのいろいろな教区からもさまざまな援助があったことも記憶にとどめておきたいと思います。こうして1949年4月17日、聖フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えてから400周年を迎えた年の、主のご復活の祝日に土井大司教の司式で献堂式を挙行し、ここに麴町聖イグナチオ教会が誕生しました。

まだまだ聖イグナチオ教会の歴史は続きますが、私の話の続きは、ここに持参しました現聖堂献堂25周年の記念カードをご覧ください。裏面にQRコードが付いており、これをスマホにかざして開きますと、先般の10月13日にアンドレア・レンボ東京大司教区補佐司教様の司式で祝った25周年記念国際ミサの様子、今回刊行した記念誌『聖イグナチオ教会のあゆみ～現聖堂献堂25周年記念略年表』の内容、教会のあゆみを短く紹介した動画など、すべて見ることができます。本日ここに少々持参しましたので、ご希望の方はどうぞお持ちください。

カト学65周年のお祝いの言葉のつもりが、上智大学も属する小教区教会、聖イグナチオ教会の開設当時の話しに発展しました。先ほどサリ理事長もおっしゃっておられましたが、カト学は、上智大学のミッションのコアを握っています。ただしそれは、決して内向きではなくて、自分たちが一致するという面と、外に向かう面、つまり上智大学内の各所へ、また、上智から学外へ派遣されていくという面とがある。大学の共同体へ、各学部各学科の仲間へ、クラブやサークル活動へ、あるいは所属する小教区教会、家庭、職場、地域社会へと派遣されていく。やはり「一致と派遣」ということになるのでしょうか。この辺りの意味を深く汲み取って自分のもの、自分たちのものとし、カト学自体もカト学の現役とOBやOGも、今

後とも発展を続けて行ってほしいと祈念しております。ご清聴、ありがとうございました。